

第九回世界俳句協会大会報告

岩脇リーベル豊美

Toyomi Iwawaki-Riebel

日本・ドイツ

今回、世界俳句協会大会に初参加し、これまで主に文字を通じてのみの既知であった「世界俳句」俳人たちの肉声を聴き、直かに触れて、感嘆とも感謝ともつかない眼から、この俳句世界の拡がりや深まりを主観的印象をまじえて綴らせていただきたい。アルプスを越えてドイツから参加したのではあるが、そこは俳句の別世界。一国の俳句という「バベルの塔」の揺らぎを嘆いている段階からはほど遠い次元に至ったという感から、今も抜けられずにいる。

九月八日より十日の三日間、イタリアは食・音楽・芸術の町パルマのサンヴィターレ宮殿で、モンテパルマ財団の支援を受け、自らも俳人・俳句翻訳家であるロマノ・ゼラスキ主導で第九回世界俳句協会大会が開催された。フレスコ画や気品ある調度のパラッツォは張りつめた中にも、イタリアという土地柄が、和んだ空気に満ちて始まった。

合わせて同宮殿内のギャラリーでは俳画展が開かれ、日本の俳画作家、清水国治をはじめとする30点以上、俳句の共感覚(シナスタシア)作品が展示された。九日の地元紙「ガゼッタ・ディ・パルマ」には、「Haiku—サムライの国のポエジー」という見出しの下、歓迎スピーチのモンテパルマ財団ロベルト・デルシニョーレ理事長とともに夏石番矢と鎌倉佐弓を中心に、世界十六カ国から集まった世界俳人たちの集合写真が掲載され、芸術の町の世界俳句に対する関心の高さを窺わせた。

大会初日となる九日には、まず「世界俳句協会会議」で二〇一六年度会計報告、『世界俳句二〇一七第十三号』の出版報告、『第二回世界俳句協会俳句コンテスト』の状況報告などがなされ、本協会の展望が承認された。

今回大会のテーマは、俳句にとって伝統的でシンプルとも思われる「風景/Landscape」。それだからこそなのか、二日にわたり行われた九人の俳論講演は多彩な内容となり、現象学的心理学的なアプローチから見えてくる風景、またポストモダンの考察としての社会・政治的風景も見られ、芭蕉、子規等の俳句の世界観とともにヨーロッパ詩学の要素も盛り込まれつつ、世界俳句の現況と多様な可能性が確認された。

夏石番矢は『俳句と風景』で、ヨーロッパ言語の「Landscape」と日本語の「風景」の語源的差違に言及し、古典俳句から現代俳句そして世界俳句に至る過程において風景俳句が単なる描写にとどまらないためには、短いなかにも深みとダイナミズムと独創性が必要だと説き、自作、

天へほほえみかける岩より大陸はじまる

を軸に基調講演をなした。

続いてフランスのジャン・アントニーニは『俳句を書く風景』と題し、フランスの俳句受容史を見た上で、二十一世紀からのフランス俳句は日本俳句の模倣から抜け、人間疎外の現代社会に破壊されてきた風景を取り戻すべく、国境や言語の境界を超えて、共通の俳句風景を蘇生する俳句、俳人のレジスタンスが必要だという。その構造主義的方法が鮮やかである。

俳画展にも出品しているイタリアの俳人トニ・ピッチーニの『内的風景』は、「フォトショップ世界への解毒剤」としての俳句による、映像などに見られる現代社会の人間悲劇(その最たるものが戦争及びHiroshima・Nagasaki・Fukushimaの核の危険である)の浄化を提唱する。内的風景に浸透した俳句には、思想の自由を贈り物として享受する理念があると、この俳人の人間性を感じた。

九日午後にはポルトガルのズラトカ・ティメノヴァを囲んで、ポディウムディスカッションが開かれた。ジャン・アントニーニ、夏石番矢、アブドゥカレム・カスイッド、カティシヤ・クラフコヴァ、トニ・ピッチーニで俳句を書く姿勢、俳句翻訳についても討論。会場からも活発な意見交換がなされた。

その後は女性の俳論講演が続くが、マケドニアの俳人カティシヤ・クラフコヴァは現代の俳句風景を、「描写的風景」、「啓蒙的風景」、「間テクスト的風景」の弁証法と解釈することで、俳句の言語ゲームの持つ創造性を探った。

ズラトカ・ティメノヴァは『俳句における都市風景美の(不)可能性』を自然風景俳句と対峙させ、文化・人間的「ドラマの表出」として示した社会性が印象深い。

鎌倉佐弓は、日本女性の俳句をあげるなかで、妻として母として女性としてのジェンダーが反映/抵抗する風景を示した。

日本学者であり俳人であるユディット・ヴィハルは古典・現代俳句対比に見られる風景の色彩を、緻密な「色のシンボリズム」で明示し、現代俳句の技術革新としては、既存の色をコントラストの中で捉える傾向に着目して、検証する。

モロッコの俳人サメ・ダルウィッシュは、シリア、イラク、モロッコ等アラブ諸国の風景俳句をフランス語で披露し、砂漠とその進化の段階を経た風景概念の存在で結んでいるが、その俳句パノラマでは、(私には未知の)異なった温度、異なった風を知覚できるのが不思議だ。

ラストインパクトに、ナポリ大学のジョヴァンニ・ボッリエッロが下位春吉(1883~1954)の功績を橋渡しに、俳句と開催地イタリアの文学風景とのつながりの起源と発展を示した。

大会二日間に、世界俳人によるオリジナル言語の朗読のセッションが十回行われ、すべてイタリア語の翻訳朗詠が付された。それに先立ち、全参加者による俳句が少なくとも二言語の、多くが多言語掲載のアンソロジーがモンテ・ウニヴェルシタ・パルマから出版され、手渡された。日本学のアプローチも活発で日本語が通用する場面もあるが、まさに日本俳句は「バベルの塔」ではありえない。季語や5・7・5拍メトリック短詩などの形式的定義ではなく、さらに奥行きのあるところでの俳句概念が求められている。

デンマークのボー・リラが不在のスウェーデン俳人カイ・ファルクマンを完璧なスウェーデン語で代読したり、イラクの詩人アブドゥルカリーム・カスイッドが当然のようにモロッコのアブデルカダー・ジャモウッシの代読をしたり、また所謂東欧の俳人たちが自分の言語で相互理解し合うシーンに遭遇すると、同語族であるということも考慮したとしても、机上のインターカルチャー性や翻訳(不)可能性に意味があるかと問わずにはいられない。

世界俳句の隆盛を悦ぶことはもちろんだが、これは、日本語で、日本の四季、日本の俳句概念に基づいてのみ俳句活動をする俳句世界への警告とも思われた。俳句そのものの脱構築が進行し、俳句とは何かを自ら捉えなおしていかなければならないなかで、夏石番矢は世界俳句をもって危機感、またその超克の可能性を突き付けている。

二日目の終盤には、カリグラフィ・エッセイの風景が企画され、紙上では墨書の日本語、アラビア語、ロシア語等のパフォーマンス詩句が記され、盛り上がる。第二回世界俳句コンテストの授賞式、閉会宣言の前には、パラッツォに融合合う日本音楽をハープ、フルート、チェロのアンサンブルで堪能することになる。コンテスト第一位には呼吸(日本)の

鍵を開け私では無くなってくる昼

が国際審査員によって高得点で選ばれた。臨席しているトニー・ピッチーニ(イタリア)の

Illusion connects	まぼろしが結ぶ
the shoe strings -	靴ひも
New Year morning	元旦

も入選した。コンテスト入賞者と功労者には、夏石番矢の自筆による

未来より滝を吹き割る風来たる

を42言語にプリントしたバスタオルおよびTシャツなどの賞品が手渡されたのち、2019年、世界俳句協会設立二十周年の第十回大会が東京の明治大学にて、それに次ぐ2021年、第十一回大会はアメリカのイリノイ州で開催されることを予告して閉会が宣言された。そして階段を下りると、ホールには最後の晚餐が準備されていて、末筆となってしまったが、パルマの歓待に対して心からの感謝を伝えたい。また昼食、コーヒーブレイクの際のスパークリングワインやパルミジャーノチーズ・ハムに加えて、世界俳句俳人との会話も、それぞれ非常に刺激的で、初参加の可能性を与えてくれた世界俳句協会に謝意を述べたい。